

# 江戸時代の遍路日記を読む



愛媛大学法文学部教授  
四国遍路・世界の巡礼研究センター長  
胡 光  
(えべす ひかる)

## 遍路日記の世界

江戸時代は、旅の時代です。260年以上続く「徳川の平和」「泰平の世」と呼ばれる時代に、参勤交代を行う武士だけでなく、許可を得て多くの庶民が旅に出ました。江戸時代の旅人が記した旅日記・紀行文や、旅人を誘う案内記を「道中記」と言い、その中で四国遍路の日記を「遍路日記」と呼ぶことにします。

江戸時代の高野聖真念は、貞享4年(1687)初めての案内記『四国<sup>ひら</sup>辺路道指南』を刊行し、「辺路修行者」があえて選んだ険しい道とは異なる安全な道を推奨して、道標や宿も整え、「辺路」の庶民化を確立しました。同書の刊行は、修行の「辺路」から巡礼の「遍路」への画期となりました。歌舞伎『四国辺路』も登場するなど、四国遍路ブームが興り、多くの旅人が四国を訪れます。なかには、日記を残し、四国の姿を書き留める者もありました。

かつて、熊野古道の世界遺産化調査に関わり、全国の道中記を収集した三重大学・塚本明氏は、260点の「道中記」のうち、四国遍路はわずか6点であったことを紹介しました。四国遍路も世界遺産登録推進のなかで研究が進み、徳島県立博物館の松永友和氏はこれまでの研究を総括し、53点の「遍路日記」があることを最近紹介しています。

「道中記」は、後人の旅の指標とするため、地名・距離・難所などが記された単調な記述のものが多くとされます。これまで筆者も、4点の「遍路日記」を発見しましたが、このうち、福岡で見つけた「遍路日記」はその描写が最も詳しく、宿の良し悪しや接待の実態

まで記されています。そこで、本シリーズでは、最新の研究成果も取り入れながら、この日記に沿って、四国遍路を行い、江戸時代の四国を旅してみます。

## 筑前国の豪商旅立つ

筆者は2013年、福岡県立図書館に保管された「佐治家文書」(佐治洋一氏蔵)について調べていたところ、「四国日記」なる史料に出会いました。閲覧すると、果たしてこれまで研究のない江戸時代における九州からの「遍路日記」であり、現存する「遍路日記」の中で最も記述内容が豊かなものでした。年記や作者名は欠落していますが、61年ぶりの金毘羅開帳に合わせて遍路する旨が記されていることから、金毘羅大権現金堂(現在の金刀比羅宮旭社)が完成した弘化2年(1845)のもので、当時の当主徳左衛門の日記と推定しました。

佐治家は、黒田長政に仕えた後、津屋崎村(福岡県福津市)に土着し、宗像郡内最大の酒屋として栄え、漁業や精米業など多角経営を行い、代々徳左衛門を名乗ります。一行は、年老いた徳左衛門母を含む7名でした。

佐治家は豪商であるため、性別・年齢など身体的な理由だけでなく、悪天候の日は宿に留まり続けるような、日程・費用に制限を設けない巡礼が可能です。「日記」の行程は、津屋崎を出発して伊予国三津浜に上陸するまでに24日を要し、三津浜から北上し四国を一周、道後に至るまで55日、三津浜から津屋崎に戻るまで11日、旧暦2月22日に出発し5月23日(欠損部推定)まで合計90日間に及びま

す。四国遍路は、農閑期の2～3月に多いとされますが、商家の佐治家は3月下旬に四国入りするので、一般的な遍路とは時期がずれます。5月になると、田植えが始まるため、宿を借りるのに苦労している様子が記されています。他に何組もの同行も見られるので、同時期の遍路が少なからずあったことも分かります。

ともかく一行は、氏神に参った後、酒・肴・寿司を用意し通夜堂に充満する、町内大師講の人々に見送られ、出立しました。

## 山陽道を歩く～錦帯橋と宮島へ

津屋崎を出た後は芦屋で船を借り、海路にて下関に渡ります。途中上陸して小倉城下町の見物をしています。中国路は、あえて南の山陽道をとらず、川棚などの温泉地を経由しつつ、萩まで北上、萩城下を見物した後、南下してようやく山陽道へ出ています。途次は、名所旧跡寺社参詣を行いつつ、夜店・芝居などの見物も忘れていません。筑後久留米連中と同行になり、福川で船を雇い、海路で北上し、岩国、宮島に至ります。錦帯橋と厳島神社は図入りで紹介されているので、感動した様子がうかがえます。

「日本一の橋」と記す錦帯橋を渡ると、店があり、うどんを食べ、土産に絵図を買いました。船で次へ向かったところ、除草用の肥こえの匂いがひどかったと言います（写真1）。



写真1 岩国錦帯橋

「日本一の景色」とある宮島では、干潮時に鳥居をくぐり、案内人を雇って、弥山みせんに登り弘法大師遺蹟を含む名所を訪ね、土産を買います。当時の宮島名物は、爪楊枝でした。一般の遍路でも土産購入は見られ、最終札所

付近で購入し、帰路につくことが通常です。豪商の旅では、たまった土産を筑前行の船に託し、随時送り届けています（写真2）。



写真2 宮島厳島神社

この観光的要素の強い岩国・宮島見物は、江戸時代後期に畿内向けに刊行した「四国案内図」にも金毘羅・善通寺とともに描かれているので（写真3）、四国遍路との組み合わせは有名なものであり、逆方向の九州からの遍路も立ち寄るものであったことが分かります。



写真3 大坂から四国、錦帯橋・宮島を結ぶ航路を描く引札

宮島を立ち、四国へ向かう途中、平清盛ゆかりの音戸瀬戸（倉橋島）で泊まりますが、殿様が立ち寄る御成門を持つ漁師の家が何軒もあったと記され、豊かであった島のくらしがうかがえます。

### 【参考文献】

塚本明「江戸時代の巡礼たちの諸相－熊野古道沿いの資料から－」『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014

愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』ちくま新書、2020

松永友和「武士の四国遍路」『四国遍路と世界の巡礼』6、愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター、2021